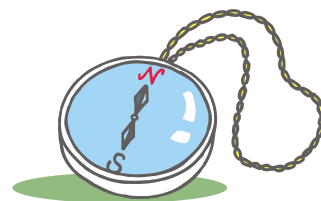


羅 針 盤



第 24 号 令和3年（2021年）11月29日（月）

◆ ショパンコンクール ダブル受賞の快挙

5年ごとに行われる世界的なピアノコンクールである「ショパン国際ピアノコンクール」を生徒の皆さんはご存知でしょうか。第18回となる今大会は、コロナ禍の影響により2度の延期がなされて、先月10月2日から23日までショパン生誕の地でもあるポーランドのワルシャワで開催されました。ピアニストにとっては予選を突破することすら難関であるといわれる、世界の一流のピアノの登竜門であるショパンコンクールで、日本人2名が入賞するという快挙がもたらされたのです。一人は2位に入賞した反田恭平（そりたきょうへい）さん、もう一人は4位入賞の小林愛美（こばやしあいみ）さんです。実はこの二人は幼なじみで、高校も1学年違いで、東京の調布市にある桐朋女子高等学校音楽科に通っていました。

当時の恩師でもある講師を務めていたピアニストでもある下田幸二さんは、「反田くんは、ちょっとめんどくさい男の子」で、「小林さんは『まあ、弾いてあげてもいいわよ、みたいな感じ』とおっしゃっています。演奏を指名されると『全然弾けませんよ』と言いながらも、楽譜を広げて、いざ引き出してみると、ものの見事に完璧な演奏をしてみせる反田くんは、やはりとても個性的であり、それでも際立った演奏力の持ち主であったそうです。



また、小林さんは、授業で演奏した後に、『ショパンの楽譜にはこうあるから、こう弾くべきじゃない？』と指摘すると、『え？そういうふうに弾きませんでしたか？さっきそういうふうに弾きましたよ』と平然として言える肝の据わった人物で、今思えばそれくらい自分の演奏に自信を持っていなければ、世界の舞台で活躍するようなピアニストにはなっていなかったのだと思いますと、小林先生は答えておられます。実力を発揮することができずに予選で敗退していく実力者も数多くいるこの大会で結果を残すことができた二人は、個性の塊といってもいいかもしれませんが、その結果を得るためには人知れず陰なる努力を積み重ねてきた結果であることは言うまでもないことです。5年に一度しか行われないこの大会は、ピアノの世界的な国際コンクールが数ある中でも格別であり、例えるなら、テニスプレーヤーが、4大大会の中でも全英オープン＝ウィンブルドンを特別視するのと同じく、『もし1つ入賞できるなら絶対にショパンコンクールだ』と思っている演奏家は数多く



いて、ショパンコンクールで素晴らしい成功を収めたら、その後はコンクールに参加しないという人もいるくらいで、“コンクールの終着駅”といった位置づけにあると言われていています。ショパンコンクールにおいては、2005年を最後に日本人の入賞者はいませんでした。そうした中で、反田さんと小林さんが実力を発揮し、2位と4位に入賞したことは、本当に大きな快挙であるといえるでしょう。何とか入賞したいという強い思いは、これまでに2人を支えてきた人たちにとっても大きな喜びとなったようです。皆さんも機会があれば、そんな2人の演奏を是非一度聞いてみてください。心の琴線に触れるような、表現力溢れる演奏を通じて、ショパンが作りだした音楽に出会うことができると思います。

びとなったようです。皆さんも機会があれば、そんな2人の演奏を是非一度聞いてみてください。心の琴線に触れるような、表現力溢れる演奏を通じて、ショパンが作りだした音楽に出会うことができると思います。